

39:1 ヨセフがエジプトへ連れて行かれたとき、パロの廷臣で侍従長のポティファルというひとりのエジプト人が、ヨセフをそこに連れて下って来たイシュマエル人の手からヨセフを買い取った。39:2 【主】がヨセフとともにおられたので、彼は幸運な人となり、そのエジプト人の主人の家にいた。39:3 彼の主人は、【主】が彼とともにおられ、【主】が彼のすることすべてを成功させてくださるのを見た。39:4 それでヨセフは主人にことのほか愛され、主人は彼を側近の者とし、その家を管理させ、彼の全財産をヨセフの手にゆだねた。39:5 主人が彼に、その家と全財産とを管理させた時から、【主】はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を、祝福された。それで【主】の祝福が、家や野にある、全財産の上にあった。39:6 彼はヨセフの手に全財産をゆだね、自分の食べる食物以外には、何も気を使わなかった。しかもヨセフは体格も良く、美男子であった。39:7 これらのことの後、主人の妻はヨセフに目をつけて、「私と寝ておくれ」と言った。39:8 しかし、彼は拒んで主人の妻に言った。「ご覧ください。私の主人は、家の中のことは何でも私に任せ、気を使わず、全財産を私の手にゆだねられました。39:9 ご主人は、この家の中では私より大きな権威をふるおうとはされず、あなた以外には、何も私に差し止めてはおられません。あなたがご主人の奥さまだからです。どうして、そのような大きな悪事をして、私は神に罪を犯すことができましょうか。」39:10 それでも彼女は毎日、ヨセフに言い寄ったが、彼は、聞き入れず、彼女のそばに寝ることも、彼女といっしょにいることもしなかった。39:11 ある日のこと、彼が仕事をしようとして家に入ると、家の中には、家の子どもがひとりもそこにいなかった。39:12 それで彼女はヨセフの上着をつかんで、「私と寝ておくれ」と言った。しかしヨセフはその上着を彼女の手に残し、逃げて外へ出た。39:13 彼が上着を彼女の手に残して外へ逃げたのを見ると、39:14 彼女は、その家の子どもを呼び寄せ、彼らにこう言った。「ご覧。主人は私たちをもてあそぶためにヘブル人を私たちのところに連れ込んだのです。あの男が私と寝ようとして入って来たので、私は大声をあげたのです。39:15 私が声をあげて叫んだのを聞いて、あの男は私のそばに自分の上着を残し、逃げて外へ出て行きました。」39:16 彼女は、主人が家に帰って来るまで、その上着を自分のそばに置いていた。39:17 こうして彼女は主人に、このように告げて言った。「あなたが私たちのところに連れて来られたヘブル人の奴隷は、私にいたずらをしようとして私のところに入って来ました。39:18 私が声をあげて叫んだので、私のそばに上着を残して外へ逃げました。」39:19 主人は妻が、「あなたの奴隷は私にこのようなことをしたのです」と言って、告げたことばを聞いて、怒りに燃えた。39:20 ヨセフの主人は彼を捕らえ、王の囚人が監禁されている監獄に彼を入れた。こうして彼は監獄にいた。39:21 しかし、【主】はヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた。39:22 それで監獄の長は、その監獄にいるすべての囚人をヨセフの手にゆだねた。ヨセフはそこでなされるすべてのことを管理するようになった。39:23 監獄の長は、ヨセフの手に任せたことについては何も干渉しなかった。それは【主】が彼とともにおられ、彼が何をしても、【主】がそれを成功させてくださったからである。

はじめに

先週、創世記 38 章を学びました。この箇所は、ヨセフの人生の話には関係のない余計な内容のように思えます。

しかし、38 章もまた、神の主権と恵みがユダとタマルの人生にあったことを教えてくれました。今週は、創世記 39 章でふたたびヨセフの人生について学びます。

ヨセフは無事エジプトに到着しました。

それは、ほこりっぽい荒野を延々と旅する長い道のりだったでしょう。

このような状況でヨセフが腹を立てたり恨みを募らせたりせずいられたのは、きっと心からアブラハム、イサク、ヤコブの神が夢で語られたと信じていたからでしょう。その夢は、いつの日か兄たちだけでなく父までもがヨセフにひれ伏すと示していました。

ヨセフにとって、それはたったひとつのことを意味していました。

つまり、将来のいつか、ヨセフが権力者になるということです。親にもまさる権力を持つようになるのです。

ユダヤの文化でそのようなことはあり得ません。

この時点では、神がヨセフの人生をどのように展開されるかヨセフには想像もつきませんでした。それでも彼は神を信頼しました。目の前の状況に好ましい点は一切なくても信頼しました。

ヨセフがエジプトに到着すると、他の奴隷たちといっしょに台の上に乗せられたでしょう。

当時は、奴隷市場で若い男女がせりかけられて売買されました。ヨセフは若くて体格もよく、ハンサムだったので、多くの買い手の注目を集めたことでしょう。

ヨセフを買取ったのは、ポティファルという人物でした。

彼は、王宮の侍従長でした。ポティファルという名前は、エジプトのことばで、「太陽神ラーが与えた者」という意味です。

古代エジプトの人々は、太陽神ラーを最も位の高い神として崇拝していました。人々は、ラーがラー自身をはじめとするすべての神々、そして人と動物を造ったと信じていました。

ラーは、神々の父と呼ばれることもありました。

ラーはたいい、ハヤブサの頭と人間の体を持ち、頭の上に太陽を象徴する金の円がある姿で描かれます。

なぜここでこのような話をするかと言うと、エジプトには目的に合わせて違った神を崇拝するので、さまざまな神々にあふれていたからです。

エジプトの王パロも、神のひとりとみなされていました。

当時のエジプトの人々の考え方は、日本人の宗教観と似ています。

エジプトの人々は多神教だったので、多くの神々を信じていました。

さて、ヨセフはこのような異教の神々にあふれた外国の地に連れていかれるという災難に遭いました。

ここから、39章の学びに入ります。

1. ヨセフはヘブル人の神に忠実でありつづけ、神はヨセフを祝福された。(1-6節)

ヨセフの優れた人格や実務能力は、すぐにポティファルの目に留まりました。

ポティファルは自分の食べる食物以外はすべてヨセフに任せました。

これは、宗教的な理由か、もしくは警備上の問題だったかもしれません。

ここで問うべきなのは、なぜヨセフがこれほど成功したのか、ということです。

その答えは、この個所に記されています。

3節に注目してください。

39:3 彼の主人は、【主】が彼とともにおられ、【主】が彼のすることすべてを成功させてくださるのを見た。

ポティファルは、ヨセフの神がヨセフに成功を与えてくださっていることに気づきました。

つまり、ポティファルはヨセフがどんな神を信じているか知っていたということです。

ヨセフは明らかに、自分の家族や、家族が崇めていた神について話したことがあったのです。

異教の神々があふれる国の豪邸で仕える外国人の奴隷が、自分の神について話さなくても当然だと思ってしまう。

しかし、ヨセフはそうしませんでした。

ヨセフは逆境に置かれても、自分の信じる神について語り、神に忠実を尽くしました。

ヨセフは若いころから信仰においては成熟していたようです。

彼は、自分の置かれた状況は神によって定められたものなので、そこから逃げる必要はないということを知っていました。

それで、神に置かれた場でできる限りのことをしようとしました。

さて、適用に話を進める前に、モーセがこの39章を記した際、「主」という単語を強調している点に注目しましょう。

モーセは、主がヨセフとともにおられたという事実に読者の注目を向けようとしています。

英語の聖書で主を指す単語“Lord”が大文字の“L”で記されている場合、これは神ご自身の名を指します。

それは、神の契約の名です。

ヘブル語で聖書の神を指す単語は「ヤハウエ」であり、それは「エホバ」と訳されています。創世記の著者モーセは、天地を創造された全能の神がヨセフの人生をとおしてご自身の目的を果たしておられるということを明確に伝えたかったのです。

ヨセフは、神による訓練を受けていたわけです。

神は、その歩みのすべてにおいてヨセフとともにおられました。

では、適用について話しましょう。

適用

「キリスト教の一番効果的な宣伝方法は、善良で敬虔な生き方である。人は聖書を読む以上に私たちの言動を読んでいる」と言った人がいます。

ヨセフは、エジプトの人々とは違いました。聖なる神を礼拝していたからです。この神は、彼の行動や労働倫理に良い影響を与えておられました。

ヨセフは、一生懸命働くことも、自分の信じる神についてはっきりと証することも恐れてはいませんでした。

このことから、私たちの大きな課題が見えてきます。

1. あなたの同僚は、あなたがどんな神を信じているか知っていますか。
2. 機会があれば職場でも適切な証をしていますか。
3. 職場で証する機会が与えられるように祈っていますか。

これらの質問に対する正直な答えを知っているのは、あなた自身だけです。

もしその答えが「いいえ」であるなら、今後「はい」と答えられるようになるために、神がどんなふうに助けてくださるか、祈ったほうがよいかもしれません。

「クリスチャンが世間と違えば、世間の祝福になれる」と言った人がいます。

世間を祝福する存在になるには、世間と違う人にならなければなりません。

ヨセフの人生は、この真理を示すよい例です。

創世記 12：1-3 で神がアブラハムを召されたとき、神はアブラハムを祝福する人を祝福し、アブラハムに敵対する人を呪うと約束なさいました。

この約束が、ヨセフとポティファルの人生で実現していました。

私たちが会社でたったひとりのクリスチャンであったとしても、その会社を神が祝福することがおできになるというのは、素晴らしいことです。

会社は私たちを適切に扱わなければなりませんし、私たちは職場で神をたたえなければなりません。

このふたつの条件がそろっていれば、神の祝福が私たちの上に、また私たちが働く会社の上に、注がれない理由はありません。

ふたつめの適用も同じく大切です。

すべての職業および人生経験は、私たちひとりひとりに対する神の摂理の中で、次の段階に進むための訓練です。

ヨセフは、将来大きな務めを担うという夢と幻を見ました。

しかし、神は、人格を形成し、信仰を強める訓練の道をヨセフに通らせ、神が栄誉をお受けになるようになさいました。

私たちも同じことです。

今私たちが置かれている場所は、私たちに対する神のご計画における次の段階に向けた訓練場です。

ですから、今神に置かれた場所で、ぜひできる限りのことをしてください。

それは、永遠に続くものではありません。将来のご計画のために神によって訓練されているとわかっているならば、今置かれたところで忍耐して頑張ろうと思えるでしょう。

私は仕事をするようになってから 47 年間経ちますが、振り返ると、いろんな失敗の中にも、神の導きの御手があったとわかります。

将来の祝福について考えるあまり、今の状況を喜ぶ心を悪魔に奪われないように気をつけましょう。

「隣の芝生は青い」ということわざがあります。

他人の持っているものや環境は、実際にそうでなくても、常に自分の環境よりよく見えるという意味です。

神に人生をゆだねる人に神は最善を与えてくださいます。ただし、神の選ばれる未来は、私たちの思い描いた未来とは違うかもしれません。

2. ヨセフが性的誘惑を拒む。(7-12 節)

7-12 節で、ヨセフは性的な誘惑を受けます。

6 節には、ヨセフが体格もよく美男子だったとあります。

同じような表記が、聖書の別の個所にも登場します。

創世記 29:17 レアの目は弱々しかつたが、ラケルは姿も顔だちも美しかった。

ラケルは誰だったか覚えていますか。

創世記 30 : 22-24

30:22 神はラケルを覚えておられた。神は彼女の願いを聞き入れて、その胎を開かれた。 30:23 彼女はみごもって男の子を産んだ。そして「神は私の汚名を取り去ってくださった」と言って、 30:24 その子をヨセフと名づけ、「【主】がもうひとりの子を私に加えてくださるように」と言った。

ヨセフは、姿も顔立ちも母親に似ていたということです。

7 節には、ポティファルの妻がヨセフに目をつけて、性的関係を持つように誘ったとあります。けれども、ヨセフはこの誘いを断りました。その理由はふたつです。

まず、ヨセフは主人から信頼を得て責任ある務めを任されていて、彼女がその主人の妻だからです。

ヨセフは、それまでに得た信頼を裏切りたくありませんでした。

次に、ヨセフがポティファルの妻の誘いを断った理由は、聖なる神に罪を犯すことはできないというものでした。

ポティファルの妻と性的関係を持つことは、聖書の神に対する罪です。

10 節で、ポティファルの妻はあきらめずに、ヨセフをしつこく誘いつづけます。

しかし、ヨセフは誘惑を拒みつづけました。

11-12 節で、ポティファルの妻がヨセフを最後にもう一度だけ誘惑しました。

家には他のしもべたちも誰もいませんでした。

ふたりが性的関係を持てば、誰にも知られなかったでしょう。

ポティファルの妻はヨセフの上着をつかんで脱がせようとしたのでしょう。けれども、ヨセフは上着を残したまま、そこから逃げました。

適用

ここにはふたつ、明らかな教えがあります。

それは、誘惑を退ける方法と、罪の深刻さです。これは私たちの日常生活にあてはまるものです。まず、誘惑を退ける方法、とくに性的な誘惑について考えましょう。

簡単に言うと、ヨセフの模範に倣うことです。ヨセフは拒みつづけました。

性的に高揚するような行為だけを拒むのではなく、性行為について考えるように誘惑する思考パターンを遮断するのです。

ポティファルの妻は、ヨセフと性的関係を持ちたいと思うようになるまでに、いろんな妄想をしていたのでしょう。

それが彼女の問題です。

7 節に、ポティファルの妻は、「ヨセフに目をつけて」とあります。

このようにして、ヨセフと性的関係を持ちたいという思いが掻き立てられました。

私たちも、不適切な性的行為について考える習慣を遮断しなければ、それを実際にしてしまうのは時間の問題です。

それがダビデとバテシェバの例です。

サムエル第二 11:2 ある夕暮れ時、ダビデは床から起き上がり、王宮の屋上を歩いていると、ひとりの女が、からだを洗っているのが屋上から見えた。その女は非常に美しかった。

ですから、不適切な性的誘惑を退ける方法は、性的欲求を掻き立てるような思考パターンや行為を拒絶することです。

長期間、拒絶しつづけなければならない場合もあります。

もし誘惑が続くなら、自分の思考習慣がイエスの血で覆われているという事実を宣言する必要があるかもしれません。

頭や心の中で起こるサタンとの戦いに勝つ最善の方法は、すべての考えや思いをとりこにしてキリストに従わせることだとパウロは語ります。（コリント第二 10：5）

これについてはもうわかったと思います。

では、次に、罪の深刻さについてです。

私たちが生きる現代社会は、「罪」という言葉自体を認めたりません。

ですから、ここでまず罪とは何か定義付けしましょう。

罪の定義は次のとおりです。

罪とは、「聖書の神によって与えられたとわかっている律法に故意にそむくこと」です。

神の律法は、十戒に含まれています。（出エジプト 20：1-17）

ですから、そのことが間違っているとわかっている神の律法のひとつに背くなら、それはその本人と神にとって罪とみなされます。

罪は、創造主と被造物の間に神が与えられた立場の違いを人間が認めないことに関わります。

神のやり方を拒絶し、自分がそうしたいから、そのほうがよさそうに思えるからという理由で盗んだり、のろったり、嘘をついたりするという選択が元にあります。

「罪」を指すギリシャ語の単語は、「的外れ」という意味です。

アーチェリーの「的」を指す単語と関係があります。

神の「的」とは 100%の聖さですから、私たちは皆、神の的を外しています。

現代社会で「罪」という単語があまり受け入れられないのは、自分の行為にあらわれる道德観をとかく言われたくないからです。

それぞれその時代の文化が、道德的に何が受け入れられるかを決定します。

現代人は、聖書の真理を道德的指針として受け入れません。

ヨセフは、その時代の文化ではなく、神のみことばと育ってきた家庭の価値観に導かれていました。

私たちクリスチャンも、善悪の判断をするとき、現代社会で受け入れられるかという基準ではなく、神のみことばに導かれたいものです。

罪は、私たちが造ってくださった聖なる神から私たちを引き離します。だから罪は深刻なのです。聖書は、罪を犯すたましいは死ぬと語ります。

この世に死があるのは、罪のせいです。

永遠のいのちは、罪を赦された者だけに与えられます。

イエスだけが、罪を赦すことのできるお方です。

イエスが私たちの罪を赦せるのは、イエスが天を離れて罪にまみれたこの世に来られ、私たちの罪の罰を負って、十字架で死んでくださったからです。

罪はそれほど神にとっても私たちにとても深刻な問題なのです。

ですから、私たちは日常から罪を深刻にとらえていなければなりません。

3. ポティファルの妻がうそをつく。(13-19 節)

13-19 節で、性的誘惑を完全に拒絶されたポティファルの妻は、自分の思いどおりにならないとわかると、その怒りと失望をヨセフにぶつけます。ヨセフに乱暴されそうになったと言ったのです。ポティファルの妻はたったひとつ証拠を握っていました。それはヨセフの上着です。けれども、それは真っ赤なウソでした。彼女は、しもべを呼びつけて、自分の主張を有利にしようとしました。ポティファルが家に帰ってくると、妻はヨセフに乱暴されそうになったとふたたび主張したので、ポティファルは激怒しました。

適用

英国には、「天には、愛が憎しみに変わったような激しい怒りは無く、地獄にも蔑まれた女の烈火の怒りのようなものはない。」という言葉があります。

これは、劇作家ウィリアム・コングリーブが 1697 年に書いた作品に登場します。

簡単に言えば、「振られた女の怒りは、地獄の火ほど怖い」ということです。

ウィリアム・コングリーブがクリスチャンだったとは聞いていませんが、この言葉は言い得ています。

ここで大切なのは、神の目に正しいことをしても、必ずしも困難や不当な状況を避けられるわけではないということです。

テモテ第二 3 : 12 確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。

ある聖書学者は言いました。「神のご臨在の中で、神の導きと加護を確信して生きても、人生は危険に満ちている。」

クリスチャンは、神のみことばに従って生きようとすれば、危険がつきものです。しかし、ヨセフはその危険を冒す価値があると考えていたと思います。

神のみことばに従って生きる危険を冒す私たちを、神が祝福してくださいますように。

4. 神とともに生きて受ける不当な扱いは、悪魔とともに生きる罪の快樂より良い。(20-23 節)

ポティファルは、すぐさまヨセフを牢獄に入れました。

彼は、妻が正直に話していないかもしれないとうすうす気づいていたのでしょう。

強姦未遂に対する当時の罰は死刑だからです。

ヨセフを牢獄に入れることで、十分に事態を收拾したということです。

けれども、当時のエジプトの牢獄は、とても住むのに適した場所ではありませんでした。

詩篇 105 : 17-18

105:17 主はひとりの人を彼らにさきがけて送られた。ヨセフが奴隷に売られたのだ。

105:18 彼らは足かせで、ヨセフの足を悩まし、ヨセフは鉄のかせの中に入った。

適用

これまで、多くのクリスチャンが、職場やビジネス、スポーツ、家庭などで正しいことをしたのになぜ祝福されないのだろうと悩んだことでしょう。

昇進できなかつたり、根も葉もないうわさで評判を下げられたりした人もいます。

教会の歴史を見れば、神の目に正しいことをする選択をした人すべてが、目に見えるかたちで報われているわけではありません。

中には、投獄されたまま命を落としたクリスチャンもいます。

けれども、もっとも完全な「キリストの予型」であるヨセフの場合は、神がなしてくださった御業が見て取れます。それは、私たちが話の結末を知っているからです。

人をイエスの似姿に変えていくことは神のみこころです。ヨセフの人生にはあるパターンがあります。引き上げられ、謙虚にされ、また引き上げられる、というパターンです。

これは、イエスの人生にも見られるパターンです。

イエスは、父とともにおられた天の栄光を離れ、ご自身を低くして、私たち人間の姿を取り、ついには私たちの罪を負われました。

イエスは、誤解され、不当に扱われました。ヨセフと同じです。

イエスは、私たちの罪の罰をその身に受けられました。それは、イエスが受けるべきものではありませんでした。そして、御父から引き離されました。

イエスは、墓に葬られ、すべてが失敗に終わったように思われました。

しかし、三日後に死からよみがえり、その後、天の父のもとに帰られました。

イエスは引き上げられ、今は、御父の右の座に座して、天と地の権威を握っておられます。

ヨセフは神を恐れる敬虔な人でしたが、迫害され、無実の罪を着せられました。

イエスは、私たちも不当に扱われると警告なさいます。

マタイ 5 : 11-12

5:11 わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせる
とき、あなたがたは幸いです。 5:12 喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは
大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。

ヘブル 12:3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、
あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

創世記の著者モーセは、39章を励ましの言葉で締めくくります。

39:23 監獄の長は、ヨセフの手に任せたことについては何も干渉しなかった。それは【主】が彼と
ともにおられ、彼が何をしても、【主】がそれを成功させてくださったからである。

神は、牢獄でもヨセフを祝福されました。

神は、ご自身の摂理によってヨセフを置かれた場所でヨセフを祝福しようと決めておられました。

神は、私たちにもそうすることがおできになります。

私たちはただ、そのことを信じなくてはなりません。